



金子 賢三さん

生活の場としてのまちの姿を考えたい

「生まれも育ちも下北沢」という金子さんは、地元で建築士の仕事をしながら、まちの移り変わりを約40年間にわたり見続けてきました。下北沢というまちのよさについて、「歩いて楽しめること、下北沢が好きな人が住んでいること、そして何よりも生活する場であること」と言います。

一見すると下北沢のまちは大変ににぎわっているように見えます。しかし、時代の流行に合わせてお店の入れ替わりも激しく、地域に定着するお店はわずか。そして下北沢のまちを貫く約60年以上前に計画された都市計画道路の

せたがや
キラリ
人

世田谷を中心に活躍する
キラリと光る素敵の方々を
ご紹介します
取材●市川 徹

「セイブ・ザ・下北沢」
<http://www.stsk.net/>
E-mail: info@stsk.net

突然の事業再開。商業化が進むことで生活基盤としてのまちは、その機能を失いつつあります。住民不在の中で計画だけが一人歩きしていく…まさに日本の抱える社会問題の縮図そのものと言えます。

こうした状況に対し、生活の場としての下北沢のまちを守ろうと、地元の仲間たちとともに1年半前に「セイブ・ザ・下北沢」の活動を始めました。活動を始めた頃には、住民のほとんどがこのまちの存続を左右する道路計画の存在を知らなかったと言います。

「セイブ・ザ・下北沢」では、下北沢

を愛する若者や趣旨に賛同した多くの人々の協力を得ながら、沢山の人の計画の存在を知ってもらおうと、広報活動や署名活動(署名数は一年を越えた時点で1万に到達しつつあるそうです)を行っているほか、交通量調査や意見書の提出、そして現在はたたき台となる代替案の作成を進めています。「代替案を通じて多くの人がまちについて考えるきっかけをつくりたい」と金子さんは話します。

「セイブ・ザ・下北沢」はよく道路の反対運動とみられがちですが、元々は「誰にとってもいいまちをつくりたい」という想いで始めた活動です。金子さん自身、「車に依存しなくても近隣で用が足りて生活できる、そうしたコンパクトシティをめざしていきたい」まちの将来像について語ります。

「みんなの意識が変わればまちは変わる」。まちを自分自身の生活の場として愛着を持ち、それを基盤にして活動を進めていく。

金子さんの言葉にまちづくりの原点と信念を感じることができました。